



創出版
1,600円

脳死移植報道の迷走 浅野健一（天文学部教授）著

著者は一九九九年三月から一〇月末まで、厚生省の臓器移植専門委員会の臨時委員をつとめた。本書はその間にかかわった一例目から四例目までの脳死移植報道を検証し、メディアとジャーナリズムのあり方を追求したドキュメントである。

通常こうした委員会の委員は任命権者（この場合は厚生省）の意向のままに動くが著者はちがった。命と引き替えの臓器移植を高視聴率獲得の対象として考えないNHKと民放、そして新聞の報道責任を明確にし、厚生省と医者（病院）による情報独占を許さない北欧型オンプズマン制度の設置を提言する。が、厚生官僚からは「報道の自由へ

の介入はできない」として断られ、他の専門委員からは無視されそれにしたがう。

NHKスペシャル『ムスタン王国』の「やらせ」、テレビ朝日「椿発言」などでも明らかになよう、放送メディアの不祥事にはすぐ郵政官僚が踏み込んでくる。だから著者の提案が拒否されたのは自らを聖域としたい省益擁護のご都合主義の行動だということがわかる。

AC（公共広告機構）の広告もドナー登録を奨励する。が、現場には問題が山積し、安易なキヤンペーンは有害でさへある。

本書ではこうした移植現場の問題が克明かつ具体的に検証され、アカデミック・ジャーナリストとしての著者の面目が躍如。浅野ゼミで勉強した大学院生たちはその後、この件で学会発表までおこなった。著者の実践教育が現状改革とともに後進学徒を育てることがうれしい。

渡辺武達（天文学部教授）



晃洋書房
2,350円

国家と教育―森有礼と 新島襄の比較研究― 井上勝也（天文学部教授）著

本書のねらいは新島襄の同時代人で、わが国初代文部大臣となつた森有礼を、新島と比較対比することによつて、新島の特質をいっそう明らかにすることである。

森有礼は薩摩藩士、新島は安中藩士で、どちらも若い武士として、幕末の風雲急を告げる時期に、幕府に内密に海外に脱出した。新島のポストン到着と、森のロンドン到着はともに一八六五年だった。本書では第一章で森が、第二章で新島が論じられ、両者の比較対比は第二章の終わりでなされている。

アンドーヴァー神学校の学生だった新島がワシントン駐在少

弁務使の森と初めて会つたのは一八七一年三月一日、ポストンにおいてであった。森は新島より四歳年少だったが、二人の間には信頼感と友情が芽生えた。新島は森の斡旋で日本政府からのパスポートを取得し、「不法密出国者」の立場から解放された。岩倉使節団の田中不二麿文部理事官の通訳兼案内役に新島を推薦したのは森であった。

一八八六年三月、森有礼文部大臣は帝国大学令を公布した。その第一条には「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ」とあり、この条件がそれ以降の国民教育を規定するよう日本の歴史は動いてきた。森の敷いたこの路線は結局のところ日本を太平洋戦争における敗戦へと導いた。これに対して新島はキリスト教教育を通して自立の民を養成することを目的とした。そのような人民こそが成熟した国家を形成できると期待したのである。

北垣宗治（教和学園大学長）



東京大学出版会
6,600円

維新と人心
伊藤彌彦（大学法学部教授）著

一言でいえば、もの見事な明治体制（天皇制国家）成立史である。といえば大方の読者は、明治国家の憲法体系や政治機構がいかに整備されていたのかといった内容を想像されるかもしれない。しかし本書はそうではなく、明治体制を生み出したといった「意識」を一貫して問題にしたものである。

歴史ははじめから予定された結末に向かつて一直線に動いているものではない。本書は結末の不明な時の流れの中で同時進行的に、人々がなにを意識し行動しながら明治体制の成立をもたらしゆくことになったのかを解明しようとした試みなのである。

著者は明治維新を目標の定かでない「乱世的革命」（竹越三又）であったとする。それゆえに維新に続く文明開化はすさまじい伝統破壊を伴う「人心の騒乱」をもたらした。これに国家存亡の危機感を持った支配層（井上毅）が、明治十四年政変を契機に「人心の教導」に乗り出すことになる。

圧巻は第四章である。そこに描かれる井上毅の「人心教導構想」は、教育勅語体制の誕生史であるとともに、福沢諭吉との意識のせめぎあいとして、従来語られざる福沢論ともいうべきものであろう。

こうして生まれた教育勅語による修身教育を根底におく明治体制は、しかしそれゆえの病理を抱え込むことになる。本書は見事な明治体制成立史であると同時にまた、見事な明治体制崩壊史の序幕でもあるのだ。

岡林伸夫（大学法学部嘱託講師）



中央経済社
3,000円

会社法の規制緩和とコーポレート・ガバナンス
森田 章（大学法学部教授）著

本書は、本学法学部の森田章教授が、既発表の論考を中心にまとめられた著書である。

表題と、さらに、「市場原理による経営監視とディスクロージャーの充実」という副題から窺われるように、本書を貫く主張は、公開会社（株式が証券市場で自由に取引される会社。平たく言えば、新聞に株価が掲載される大企業）の経営の監視は、基本的には市場原理に委ねられるべきだ、というものである。そのためには、法規制が大幅に

緩和され、他方で、株主・投資家へのディスクロージャー（情報開示）が徹底されなければならない。

以上の基本的視角から、次の問題について、著者の見解が示されている。①会社の社会的責任、政治献金、②株主権の内容、機関投資家の行動原理、③株主総会と株主提案権の役割、④取締役・取締役会の職務と責任、経営判断原則、⑤企業買収、第三者割当増資、⑥株主代表訴訟、無償供与の開示・監査、⑦株主宛の年次報告書の導入論。

これらは、いずれも、現在のわが国の公開会社の経営をめぐる重要問題である。右に述べたような一貫した視角による検討を行う本書から、読者は、公開会社の経営監視の問題にとどまらず、わが国の経済・社会が置かれている現在の状況について考える際の、有益な示唆を得ることができらるだろう。

伊藤靖史（大学法学部専任講師）



晃洋書房
2,200円

現代国際経済研究

同志社大学アメリカ研究所編

藤原秀夫 同志社大学大学院商学研究科教授

植田宏文 同志社大学商学部助教授

篠原総一・西村 理

同志社大学大学院経済学研究科教授 ほか執筆

この十年間で、日米の経済関係は激変した。アメリカ経済がインフレなき成長を謳歌する一方で、日本はバブル崩壊後の「失われた十年」という長期不況からいまだに脱出できずにいる。藤原教授を研究代表者とするアメリカ研究所の共同研究「地域経済統合とアメリカ経済政策に関する理論的実証的研究」をまとめた本書は、現代の国際経済の諸問題を日米経済関係という統一的な視点から整理している。

理論編では、「為替レートの買

易収支調整能力はない」とするマツキノン・大野の主張についての批判的検討(藤原教授)、企業の資金調達の変化がマクロ経済の不安定性を高める可能性の検討(植田助教授)が行われている。

実証編では、筆者の体験に基づく日米経済システムの比較とIT革命の影響(地主敏樹教授)、「ハイブリッド・コントロール」という日本型コーポレート・ガバナンスの行き詰まりと新たな模索(西村教授)といった対照的な日米経済の要因分析が行われている。また、日米関係、ドルと円の関係という視点からの東アジア通貨危機の実証分析(久保田哲夫教授、山上宏人教授)、および市場経済化途上の中国における在庫投資と生産性に関する日米との比較実証分析(篠原教授ほか)が行われている。

一読を勧めたい。

藤田誠一(神戸大学教授)



森山書店
3,200円

将来事象会計

加藤盛弘(大学商学部教授) 編著

志賀 理(大学商学部助教授)

瀧田輝己(大学商学部教授) ほか執筆

企業の損益計算には、伝統的にながしかの将来予測要素(将来事象)が織り込まれてきたが、現代会計における将来事象導入の拡大は、量的にも質的にもまことに著しいものである。将来事象は現代会計の性質の理解にとつて極めて重要な要素となっている。本書は加藤盛弘教授をはじめとする十三人の研究者が、現代の会計基準、税務会計、およびそれを支える会計理論と会計監査という広い観点から前述の問題を検討した本格的な研究書である。

本書ではまず、アメリカでは将来キャッシュフローをキー概

念とする現代会計理論において、将来事象の会計への導入が必然的なものとされていること、およびその導入のあり方が損失事象会計に傾斜しており、かつその会計処理が会計プロフェッションの権威によって支えられていることが指摘される。プロフェッショナル会計制度をとるアメリカでは、将来事象会計の導入も会計プロフェッションの存在を前提とするあり方になっていることが析出されている。

また、アメリカと異なる会計制度をとるドイツでは、将来事象会計導入のあり方も異なっていることが指摘され、将来事象会計導入のあり方がその国の会計制度のあり方と深く関係していることが析出されている。

本書はこのように将来事象会計を例に現代会計の性質を解明せんとする本格的な研究書であり、現代会計の理解のためにぜひ一読を薦めたい著書である。

川本和則(岡山商科大学専任講師)



潮出版社
1,600円

メディアと情報は誰のものか 民衆のコミュニケーション権からの発想

渡辺武達 (大学文学部教授) 著

現代社会においてメディアと情報が重要なのは誰でも意識しているが、実際の現場がどうなっているのか、今どのような問題が緊急にわれわれに突きつけられているのかは案外意識の埒外にあるのではないか。本書は「ミッチー・サッチー論争」からインターネットまで幅広く問題をとり上げて読者の目を開いてくれる。例えばアメリカでカード決済をすると店舗に個人のカード番号が残り、その番号は正当な商取引で得た「知的財産」だからその番号を他に転売して

も違法ではないということになるらしい。これは本書を読むまで知らなかった。

また、本書はハーバードスの「公共圏」への徹底的な批判に見られるように極めて原理的な批評でもあり、日本のメディア研究の水準の高さを世界に示す一冊である。そのような名著を生み出した根底には、あらゆる権力・権威に決して屈することのない著者の不屈の精神がある。かつて「荒法師」の異名を取った元NWA王者のジン・キニスキーは世界中を転戦し、どんな挑戦者とも真つ向から勝負を挑んで「闘うチャンピオン」と呼ばれたが、過去四百回の渡航経験をもち、百カ国以上の国々の土を踏んできた著者もまた「闘うプロフェッサー」としての面目躍如たるものがある。

田口哲也 (大学言語文化

教育研究センター教授)



山書店
2,800円

日本の会計士監査

百谷野正博 (大学商学部教授) 著

アメリカの制度を範としてわが国に公認会計士制度が創設されてから五十年余りが過ぎた。

この間、粉飾決算の多発や監査環境の変化を契機として、監査規範の大改訂、監査法人制度の創設、商法監査の導入など、公認会計士監査の充実・強化が図られてきた。しかし、昨今、不良債権の肥大化、上場会社の大規模倒産、違法配当、粉飾決算疑惑など、企業会計・監査にかかわる諸問題がクローズアップされ、社会の関心を再び集めている。もちろん、これらはたんに

監査の問題にとどまるものではないが、それにしてもわが国の公認会計士監査制度のどこに欠陥があるのであろうか。あるとすればその原因は何であろうか。著者は、この問いに対する回答を、わが国とは異なる社会的経済的要請のもとで生成・発展してきたアメリカ監査をそのまま手直しすることなくわが国に導入し、また、その後追いを続けてきたことに求めている。そして、それを論証するために、公認会計士はなぜ粉飾決算を摘発することができなかったのかという疑問に焦点を絞り、会計士監査の社会的機能、経営者不正の摘発についての会計士の責任、試査、内部統制をキーワードとして考察している。

コーポレート・ガバナンスの強化が叫ばれている今日、公認会計士監査が果たすべき社会的な役割はますます重要になってきている。本書は、わが国の社会的経済的要請に応える「日本に根付いた監査」を考える一視点を提供する好著であり、一読をお薦めしたい。

林 隆敏 (関西学院大学助教授)



日本人をつくった教育
藩校 寺子屋・私塾

沖田行司 (大学文学部教授) 著

例えば鎖国時代の「漂流記」を読むと、日本の漁民たちが、漂着した他国で、自らのことを何気なく「日本人」と名乗っている記事に出会う。彼らは万国地図の上に「日本」という国を指さすこともできたようである。これは、よくよく考えてみれば、日本人というアイデンティティの確立を背景にした、かなり高度な自己認識力である。特別の高等教育を受けたわけでもない彼らは、いったいどこでこのような知識を得たのであろうか。

本書は、現代の「日本人」意識を形成した直接的源流と考え

られる江戸期の教育の姿を明らかにした書である。著者の眼は、寺子屋や私塾、藩校を捉えながら、同時に現代の教育の問題点をも見据えている。

平易な文章の中に、読者の先入観が暴かれる鋭い指摘が数多く用意されている。例えば、「寺小屋」と「寺子屋」との相違から、我々が思い浮かべる「寺子屋」の像が、歌舞伎などから得たものに過ぎないことが紹介され、その上で、落ちこぼれをつくらない当時の「寺子屋」教育の実態が明らかにされる。さらにこの初等教育の方法学を検証の上で、藩校におけるエリート教育や、私塾の個性的な教育の実態も浮き彫りにされる。コンパクトな本に、詰め込まれたものは実に豊富である。

読み進めるうちに、読者も知らず知らず現代の教育問題について考えさせられることになろう。心にくいつくりの本である。

真銅正宏 (大学文学部助教授)



アメリカ人の核意識
—ヒロシマからスミソニアンまで—

アラン・M・ウインクラマー著
麻田真雄 (大学法学部教授) 監訳

本書は、アメリカの核政策とアメリカ人の核意識を、半世紀(ヒロシマからスミソニアンまで)の流れの中で分析した研究書である。初学者にとっては、アメリカの核政策の変遷をコンパクトに概観できる利点があるし、専門家にとっても、政策史と思想史の結合という課題に、多くの示唆をえられよう。

著者によれば、アメリカ人の核意識のキーワードは、恐怖と希望である。アメリカの反核運動は、政府の政策に対して異議申し立てをくり返し、一定の成

ミネルヴァ書房
3,800円

果をあげてはきたものの、他方で、核の技術とエネルギーが約束する(かに見える)将来への希望も根強い。だが、著者はかく論じながらも、異議申し立て者たちの成功が、「それがいかにささやかなものであれ、未来への最上最善の希望を与えてくれるものである」と、本書を結んでいる。

最近、核拡散防止条約(NPT)再検討会議は、核兵器の廃絶を加盟国の絶対的な目標と規定した。アメリカ(核保有国)と非核保有国の核意識を比較するとどうなるのか。「唯一の被爆国」日本での異議申し立ては、アメリカのそれほど「最上最善の希望」を与えてくれるのか。本書の問いかけは大きい。

学術書の翻訳としては例外的なほど、こなれた訳文になっている。また、このテーマにご関心の深い向きには、監訳者による一連の実証研究にもあたることをお薦めしたい。

村田晃嗣 (大学法学部助教授)



水声社
3,500円

プラスチックの文化 史 可塑性物質の神話学

遠藤 徹
(天学言語文化教育研究センター専任講師) 著

大学でキリスト教を学んだ頃、「原始の地球で、無機物のスーパから生命が誕生した」とするオパーリン説に関心をもった。当時の私の理解では、キリスト教において有機体と無機体の差異は絶対であり、無機体から有機体への進化は〈神の意志〉の介入なしには不可能であった。もし、この〈飛躍〉なしに生命の誕生が可能ならば、生命とは種の保存へとプログラムミングされた機械にすぎないのではないか。

生命／物質という対立から出発して神か機械かという両極端

の間で苦悩するこの凡庸な近代的思考を、本書は超えようとする。そのために提出される第三項が「高分子物質（ポリマー）」である。「無機物である分子の連なりがポリマーであるという視点から見ると、プラスチックや合成繊維と、DNAや酵素は同じ種類に属する」。だとすれば、「人間とプラスチックの間には本質的な違いはない」。「すべての生命体やプラスチックをも含めた有機化学反応系という視点で世界を捉えなおし、より柔軟な共存の道を探ることこそ、今ぼくたちが早急に取り組むべき課題なのだ」。

生命／物質という対立をポリマーにおいて総合し、二〇世紀の歴史を「ポリマーの文化史」として捉えること。ヘーゲルならば、それを〈精神〉と名づけるだろう。本書は、プラスチック時代の〈精神現象学〉への第一歩である。

高木繁光(天学言語文化教育研究センター助教)



法文文化社
2,500円

京都観光学

山上 徹 (天学現代社会学部教授) 著

味での人間的な労働力の再生産に資する観光・余暇の役割が増大している今日、観光研究は新たな視点で追求される必要があると思われる。

高度成長期を通じて形成されてきた日本社会の仕組みが、あちこちで綻びをみせていることは事実であり、それにとつて替わる新しい仕組みの予兆は、私たちの日々の生活にも現れている。たとえば、生活における労働と余暇との関連のあり方なども、この間次第に、しかし確実に変化してきた。余暇の一形態である観光も、従来の名所旧跡などへの行楽型から参加・経験を重視した学習・啓発型へと移行してきている。労働||日常にたいして余暇||非日常として、事実上、余暇の価値を一段階低く見なす考え方も再考の余地がありそうである。単に肉体的な次元に矮小されない、広い意

その点、山上氏の新刊は、余暇生活の一翼である観光を幅広い知見から考察している好著である。特に、焦点を京都という土地柄に設定し、これを祭・食文化・修学旅行・都市景観・国際観光などの諸点から多角的に考察していることが特色となっている。そして、京都の観光の現在だけでなく、モノを「Law-thing」することから自己実現する「Thing」への希求の高まりに対応した「もてなし」の心としてのホスピタリティを提唱して、京都観光の発展方向を指し示していることも魅力の一つになっている。観光を考える専門学会である京都学会の提唱とあわせて、今ホットな話題を提供している著書である。

河野健男(女子大学現代社会学部教授)



ベストセラーのゆくえー明治大正の流行小説

真銅正宏 (天学文学部助教授) 著

「なぜ流行し、なぜ忘れ去られたのか」——尾崎紅葉『金色夜叉』をはじめとする明治大正の流行小説の、価値の編目再編作業に果敢に取り組んだ本書の面白さは、まずは「流行小説」とは、いわば複合領域を指し示すのである」という観点に立って、演劇や寄席芸との関係で流行小説の盛衰を考察した部分に現れている。この関係は、小説の劇化ばかりでなく、「戻り」や「だんまり」を媒とする両者の方法上の類似も含むのだが、その点を個々の小説に即して明示していくあたり、数多の観劇体験（「あとがき」）に支えられた著者

の「見巧者」「読み巧者」ぶりが遺憾なく発揮されている。

そして、そのスタンスが、訓練された読者と、読書行為を継続させる牽引力(小説のつくり)を持つ作品との間に生じる「テクストと読者の往還関係」という視点を呼び込み、この点に關して多くの工夫を凝らした流行小説の存在を再浮上させるべく、ラディカルに機能していくところが面白さの第二点目。すなわちそこでは、偶然の効用(村井弦齋『小猫』)や議論の効用(小栗風葉『青春』)が測り直されれるとともに、そうした文学的営為を「通俗」呼ばわりしてきた価値基準の恣意性が批判の対象となる論が展開されているのだ。さらには、この実験を成功に導くために、昭和十年前後の通俗小説の概念から遡及する手続きが随所でとられているのも、読み応えのあるところだ。

大橋毅彦 (甲南女子大学助教授)



洛東遺芳館所蔵 古浄瑠璃の研究と資料

山田和人 (天学文学部助教授) 著

山田さんは、フィールド・ワーカーである。連綿とした人びとのパトナッタッチの果てに今も上演される各地の人形浄瑠璃やカラクリ芝居、代々の人びとの受け渡しによって現在まで保管されつづけた浄瑠璃本や人形首……。そんな「現在」と、それらが息づいていたはずの「過去」との橋渡しが、山田さんの研究姿勢の原点の一つ。けれども、フィールド・ワーカーは、「出たとこ勝負」なのである。たとえ予備調査で何かを目指して訪れたとしても、フィールドで新たに直面するのは、「学

和泉書院
12,000円

界」で知られていないか、その「価値」が定まっていらないものばかり。だからこそ、フィールドワークは楽しいし、難しい。

この本は、そんな山田さんが出会った、京都のある商家に伝わる近世の芸能及び演劇関連の板本資料を整理した成果。その中心は、近世前期の古浄瑠璃三作品（『源平軍論』『弘法大師出世之巻』『熊野権現開帳』）に関する研究・翻刻・影印で、これに勝川春章の『芝居役者絵本』の解題・影印、「近世芸能・演劇関連資料目録」が付される。三作品には版式・挿絵・諸正本本文の対照、関連作品や説話とのプロット比較など、作品に応じた手法を駆使した、浄瑠璃史や諸本関係の中への丁寧な位置づけがなされている。

この本は、フィールド・ワーカー山田さんの「価値」への戦いと、フィールドへの誠実な「お返し」の結晶なのである。

西岡直樹 (天学文学部助教授)



朝日出版社
3,000円

イギリス文学への招待

圓月勝博・斉藤延喜

(以上大学文学部教授)

秋篠憲一・勝山貴之

山口賀史 (以上大学文学部助教)

金谷益道 (大学文学部専任講師)

編者

英文学史を教える際に困るのは適当な本がなかなか見つからないことである。あれこれみても、結局は自分で講義ノートを作ることになってしまう。そんな折一冊の本が出た。正直言つて、従来のようなものを想像したが、うれしいことにその予想は見事に外れた。

まずこの本の特徴は、英文学史を単なる暗記物に終らせていないことである。「はしがき」には「楽しみながら」とあるが、むしろ「考えながら」英文学史を理解させてくれている。文人

と作品にも従来の定説・解説をつけていくのではなく、それらはその時代と分かち難く結びつけられている。事柄によってはかなり掘り下げられているのも執筆者の専門への造詣の深さを伺わせる。しかし、なじみの薄い事柄には身近な例で親しみを持たせる工夫も忘れられてはいない。また、各分野の最近の動向までもカバーすることによって、英文学史という大河が今も流れ続けていることも示されている。「楽しい散策」のために用意されたコラムは一服して、あるいはこれだけを拾い読みしてもおもしろく、少しばかり物知りになった気分にもさせてくれる。

執筆者がみな英文学科のスタッフというのうれしい。六人六様の特徴もみえて、単著書にはない味わいである。これからの同志社大学の英文学科を担っていた各執筆者に、期待を込めてエールを送りたい。

二村宏江 (大学文学部教授)

経済学部公開講座

協力：(財)経済広報センター

はばたけ日本産業 —グローバルゼーション時代を生きる—

■日時：毎週金曜日16:45~18:15 ■場所：今出川キャンパス明德館21番教室

日程	講師	サブ・テーマ
10月13日 20日	住友電気工業(株) 副社長 伊藤 進一郎氏	企業会計におけるグローバルスタンダードへの調和と民間からの積極参画 新たなコーポレートガバナンスの構築と日本型経営の改革
10月27日	関西電力(株) 副社長 藤 洋作氏	電気事業の課題と展望
11月10日	取締役 森本浩志氏	//
11月17日 24日	(株)村田製作所 副社長 泉谷 裕氏	電子部品産業のグローバル化 グローバル企業の課題
12月1日 8日	(株)クボタ 会長 岡本 修氏	日本の農業機械産業と国際化
12月15日 22日	東洋紡績(株) 専務取締役 岡田 勲氏	グローバルゼーション IT化が産業界にもたらすもの ~新たな産業構造の構築が課題
1月12日	松下電器産業(株) アジア大洋洲本部企画部部長 安積敏政氏	岐路に立つアジアの日本企業

全講座
聴講無料

* 申込方法：往復ハガキに希望講師名(複数可)、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を記入の上、申込ください。

■申込み先/経済学部事務室 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 ☎075-251-3520